

命じられるままに絵を描いているのでは満足できなくなった……

……真実を描こう……



《Children behind wires》

MIECZYŚLAW KOŚCIELNIAK

真実を伝え続ける絵画

—アウシュヴィッツに生きたM・コシチェルニャック展—

2015年 3月24日(火) — 4月23日(木)

会場 早稲田大学 26号館大隈記念タワー 10階 125記念室

開館時間 10:00~18:00

● 休館日/日曜日 ● 観覧料/無料

主催：ポーランド広報文化センター、駐日ポーランド共和国大使館、早稲田大学

協力：野村路子



問い合わせ

早稲田大学文化推進部文化企画課

TEL : 03-5272-4783 FAX : 03-5272-4784 <http://www.wasedabunka.jp/>

MIECZYŚLAW KOŚCIELNIAK

真実を伝え続ける絵画

—アウシュヴィッツに生きたM・コシチェルニャック展—

ホロコーストの事実を伝える写真の多くは、加害者であるナチスが撮影したものである。コシチェルニャックら何人かの収容者たちは、見つければ殺されるのを覚悟で収容所の実態を描いた。その絵は、単に悲惨さを描いたものでなく、地獄のような場にあっても、消し去ることのできない人間の尊厳と創造の喜びを伝えている。コシチェルニャック夫人は、「次の世代に二度と同じ過ちを繰り返してほしくないという亡夫のメッセージを日本の人に…」と、絵画19点を野村路子氏（作家・早稲田大学卒）に託した。これらは野村氏のもとで、大切に保管されてきた。戦争終結から70年の今年、野村氏は画家の故国であるポーランドに絵画を帰らせたいと寄贈することを決めたが、その前に日本の若い世代に見て、知ってもらいたいとの願いから、早稲田大学にて展覧会・シンポジウムを開催することになった。

貴方は、アウシュヴィッツから何を学ぶか——コシチェルニャックが命がけで書き残した絵から聞こえる声に耳を傾けていただければ幸いである。

ミェチスワフ・コシチェルニャック

1912年ポーランド生まれ。美術アカデミー卒業後、絵画制作に励んでいたが、'39年、開設直後のアウシュヴィッツへ送られた。日常的な暴虐と殺戮の事実を伝えなければと、解放後もずっと真実を描き続け、初代アウシュヴィッツ博物館館長を務め、'93年没。



(Eisenhower and Patton)



(Father Maksymilian Kolbe)

関連イベント

シンポジウム 「アウシュヴィッツ」は今、私たちに何を語るか

第二次世界大戦中のナチス・ドイツによるユダヤ人に対する大量殺戮は、人種を理由として国家が組織的にジェノサイドを実行した極めて異常な出来事だった。その中心となったのがドイツによって占領されたポーランドの6つの絶滅収容所であり、その最大のものが「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所（1940年—1945年）」だった。現在、負の世界遺産として登録されているアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所について、戦争終結から70年たったこの世界情勢のなかで、あらためて考えることは意義深いことであろう。シンポジウムでは、現代の私たち自身の問題として、アウシュヴィッツの意味を再考し、これからの国際関係のあるべき姿を探っていきたい。「真実を伝え続ける絵画——アウシュヴィッツに生きたM・コシチェルニャック展——」の開催に合わせて、このシンポジウムを開催する。展覧会の観覧と合わせて、シンポジウムへ足を運んでいただきたい。

日時：2015年4月18日(土) 13:00～17:30

会場：早稲田大学戸山キャンパス 36号館 382教室

パネリスト：武井彩佳（学習院女子大学国際文化交流学部准教授）

古矢晋一（早稲田大学・慶應義塾大学 非常勤講師）

宮崎 悠（北海道教育大学教育学部国際地域学科専任講師）

コーディネーター：大内宏一（早稲田大学文学学術院教授）

定員：先着250名

参加費：無料

参加方法：当日直接会場へ

主催：ポーランド広報文化センター、駐日ポーランド共和国大使館、早稲田大学

協力：野村路子

【問い合わせ】早稲田大学文化推進部文化企画課

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 大隈記念タワー2階

TEL：03-5272-4783 FAX：03-5272-4784

<http://www.wasedabunka.jp/>

- 【交通案内】
- ▶ JR山手線・西武新宿線「高田馬場駅」より徒歩20分
 - ▶ 「高田馬場駅」より学バス（早大正門前行）利用10分
 - ▶ 東京メトロ東西線「早稲田駅」より徒歩5分

